

第17号

2010年 11月1日
 ○発行
 650-0004
 神戸市中央区中山手通
 7丁目25-38
 神戸真生塾広報誌編集係
 TEL (078) 341-5897
 FAX (078) 341-8239

<http://www.kbshinsei-j.org/>
 ○振替口座
 郵便振替01100-8-18680

先達の遺したものを、活かして

神戸真生塾評議員
 神戸女学院大学学長
 飯 謙



社会福祉法人

神戸真生塾

二〇一〇年五月に神戸真生塾の評議員に就任させていただきました。ここに皆さまにご挨拶を申し上げます。あります。神戸真生塾の幼き魂、若き魂の健やかな成長を覚えて微力を尽くしてまいります。今後ともよろしくご指導くださいますようお願いいたします。

私と真生塾との出会いは一九八一年、わたしが日本基督教団神戸教会に伝道師として着任したときにさかのぼります。神戸教会は真生塾の設立以来、深い関わりをもっています。わたしも着任当初より塾長・理事長であられた水谷愛子先生を始め、塾に関わる方々と自然にお交わりをいただくようになりました。近代神戸の黎明期に時代を先取り

した事業を始めたことを知り、たいへんな敬意を覚えました。またわたしは、わずかの期間かつ初歩的な事柄にすぎませんが、阿部志郎先生が教鞭をとられた明治学院で社会福祉を学びました。その点からも、わたしは真生塾にはとても親しい想いを懐いたものです。具体的に真生塾のお仕事に携わることがありませんでした。すぐお隣で活動する社会事業として、隠れたところでエールを送っておりました。

着任から二年後、やはり真生塾と歴史的に長いつながりをもつ神戸女学院に奉職し、現在に至っています。神戸教会を辞する祈り、水谷愛子先生から、二年間という在任は短すぎる気がするが、「ウチの学校に行くんやたらええわ」と声をかけていただきましたのが昨日のことのように記憶しています（水谷先生は神戸女学院の同窓会長や理事をお努めでした）。短い言葉でしたが、忘れることなく心に留めてまいりました。この度、

評議員にとお話をいただきました。した際にも、そのことを思い起こしました。勝手な解釈ですけれども、今回は「ウチの真生塾に」とお声がけくださったのだ、と。身の引き締まる思いで、しかし喜んで、就任させていただきました。

わたしの勤務する学校は、一八七五年に米国から派遣されたお二人の女性宣教師によって設立されました。お二人は「神を愛し隣人を愛する」とこーリスペクトをもつて他者に仕えることを語られました。それはこの学校に学ぶ人たちに有形無形の感化を与えてきました。そして苦闘しながらも、いまなお生きたメッセージを発信しています。今日、日本の私学は一樣にその軸足を明らかにするよう求められています。背景には多くの学校がそれをないがしろにして、無原則な拡張に走ってきたという事情があります。実際、この期に及んで初めて「建学の理念」を考え出した学校もあるやに聞きます。このこと

は、教育機関のみならず、企業や各種団体、さらには国家にもあてはまることであると思えます。先達の遺したものを、その意思にかなうよう受け止め、活かしていく。わたしは、このところで、ささやかであれ、神戸真生塾に貢献できたかと願っております。

わたしは社会福祉の世界に深く通じた者ではありませんが、それでも、現代の社会福祉の様態が、たいへんなスピードで変化を強いられていることを側聞しております。かつては個人の善意で推し進めることができ、またそれが歓迎されていたと解された時代はありましたが、いまは行政や地域とNPO、さらには企業までも巻き込んで、多くの人が関わる中で展開することが求められていると感じます。それはこの現場が、多くの人のさまざまな願いと祈りを結集するところであるよう求められています。このことを念頭に置き、いと小さき思いを届けられる働きをなしてまいりたく存じます。

最後になりましたが、神戸真生塾に連なるすべての皆さまの上に、天来の祝福をお祈りさせていただきます。

《乳児院 真生乳児院》

おめでとうございます

神戸市長表彰

十五年目保育士

福永 和美さん

真生塾の子どもたちと出会い早十五年が経ちました。可愛い姿に微笑ましく喜びや感動など数多くの事がありました。

これからも子どもたちの成長を見守り、一人ひとりとして向き合っていきたいと思えます。

神戸市社会福祉

協議会

理事長感謝状

十年勤続

岡本 紀江さん

福祉の世界で働くことなど全く考えていなかった私に、真生塾で働く場を与えてくださり、十年が経ちました。たくさんの子どもたちと関

わらせていただいたことが何よりも感謝です。これからも新しい出会いが楽しみです。

民間社会福祉

施設職員

神戸市長感謝状

五年目保育士

福本 真弓さん

日々成長する子どもたちに元気をもらい、働き始めてあっという間に五年が経ちました。これからも、子どもたちとともに楽しく、笑顔の絶えない生活を送れるよう、環境づくりに心がけたいと思います。



幸せの架け橋



タンポポクラス 主任保育士 清水 裕子



長い長い春を待っていたタンポポクラスの子どもたちに今年五月より、次々と里親さんとの出会いがありました。マッチングが始まり、面会、外出、外泊と初めての経験が続いていく中で、子どもたちは里親さんが自分のことを一番大切にしてくれる特別な人であることに大きな期待と不安を抱きながら過ごします。私たち、乳児院の保育士の仕事は「施設だから」ではなく、保護者と家庭で育つことのできない子どもたちの「施設だからこそ」という思いで少人数制を取り、家庭的な養

育に近づけられるように、個別担当制で愛着形成をしつかり図って安心した生活ができるように日々努力しています。里親さんの関わりが始まると、大きく混乱して不安な状態が見られます。例えばMちゃんには夜になると「ずっと傍におってよ」と不安で泣き、Yちゃんは棚にしがみつき泣いて外出を拒否し、Kくんは以前にも増して指吸いが多くなり、Yちゃんは往復の混乱で泣くことが増えるなど、小さな体で状況を理解しようと頑張るのです。そこで私たちは外出や外泊前には期待感が持続するような前向きな言葉かけをし、帰院時にはしっかりと受け入れ、温かくフォローするなど全力投球です。すこしずつ乳児院の保育士から里親さんへスムーズに気持ちに移していきけるように、自然に里親さんとの愛着が築かれていく作業が最も困難で、ずっと担当してきた保育士・看護師にとってはとても辛い

ことです。しかし、子どもたちが里親さんの深い愛情をたっぷり注いでもらいうちに、不安も薄れていき、帰院時の表情がどんどん輝いていくので、私たちも期待に夢が広がりに無限の喜びを感じます。生まれて数年、「三つ子の魂、百まで」と言いますが、乳児院が行政より預かって親の代わりとなり養育してきたことが子どもたちの心の中に育っていることを信じ、子どもたち一人一人が「十人十色」の幸せをつかんでくれることを祈ります。



恒例の納涼大会



例年には見られない程の猛暑が続いた今年の夏でしたが、八月二十一日(土)、天候にも恵まれ恒例の納涼大会を開催することができました。

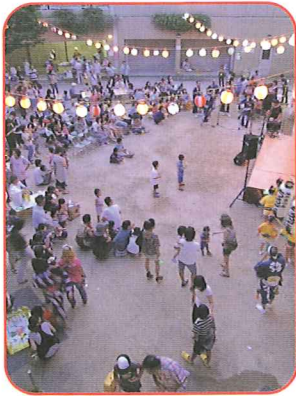
会場が熱気で包まれる中、乳児院の子どもたちが愛らしい姿でアンパンマン音頭やダンスを披露して、ほほえましくプログラムが進行していきました。

次は、小学生女子によるパフォーマンスでしたが、リハーサルの際は照れてうつむきかげんの子どもたちも、いざ本番では練習の成果を発揮して活き活きとした表情で踊っていた姿が、印象的でした。その後、中高生女子と職員、うたっこクラブと続く中で、舞台上上がる前の子どもが、「ドキドキするわ、上手に歌えるか心配やわ。」と緊張さみで

したが、歌い終えた子どもに目を向けると、ピースサインで答えてくれました。

模擬店は、かき氷、たこ焼、フランクフルト、がらくた市、金魚すくい、ゲーム等の十数店舗を出店しましたが、たくさんの方々に並んでいただき、大盛況で完売する店もありました。

提灯の明かりが会場を照らし始め、ステージ上では、子どもと職員によるバンド演奏、そして最後に「神戸ちるど連」の皆様による阿波踊りで、納涼大会を盛大のうちに終えることができ、素敵なフィナーレとなりました。子どもたちも、それぞれに夏の思い出の一コマになった事と思います。



会の準備に携わって下さった方が、「真生塾の夏祭りに参加させていただいて毎年思うことは、子どもたちのキラキラとした笑顔に出会えて元気をいただいています。」とお話をいただきました。

改めて納涼大会には、たくさんの方々からあらゆる場面において御協力いただいていると共に、お忙しい中、来場下さった関係機関の方々、先生方、地域の皆様、御家族の皆様、里親の皆様、ボランティアの皆様等々、多くの方々の温かい御支援により、開催できたことを職員一同、心より感謝しています。

(毛利)

子どものつぶやき

☆ 地下鉄に乗ったあと、「シンカテツ、のったね」。地下鉄と新幹線がくつついたのかな？ (二歳・女)

☆ ドアを開けたり閉めたりしているNちゃんに、「なにしているの？」と保育士が聞くと、「ドアとあそんでいるねん。」と。(三歳・女)

☆ 入浴後、体を拭いているAちゃんに、「Aちゃん、大人になったら、Aちゃんもおちんちんからヒゲがはえてくるんだよ。」と、Kくんが教えてあげていました。(四歳・男)

☆ 保育士の顔を見て、Yちゃんは言いました。「おねえちゃん！ 顔にいっぱいホクロがあるね！」ホクロじゃなくて、シミ・そばかすです。(五歳・女)

☆ 水族館へおでかけとなったJちゃんです。うれしくてうれしくて、「おねえちゃん、のびのびポートパス、ちょうだい！」。もう一度ゆつくり言ってみると、「のびのびポート」と言えました。(六歳・女)

《児童養護施設 神戸真生塾》

琵琶湖キャンプ

毎年、夏の一大イベントとして子ども達が楽しみしている神戸真生塾の夏キャンプ。昨年から二つに行き先が分かれて行うようになりまして。今年の琵琶湖キャンプは中高生と幼児の子ども達で七月二十九日から七月三十一日の二泊三日で行って来ました。天候が少し悪い時もありましたが子ども達、職員共々皆大きな病氣・事故・怪我なく三日間存分に自然の中で楽しむことが出来、感謝しております。

中高生と幼児の子ども達が一緒に過ごすということで、中高生の子も達としては少し物足りなかつたこともあつたかと思いますが「俺らにもあんなに可愛い時あつたのにな」とポツリ呟く子どもの姿や、優しく導き手助けをしてくれる頼もしい姿を見ることが出来、見ていて心が温かくなりました。

子ども達は琵琶湖での泳ぎを楽しんだり、職員と魚釣りをしたりとそれぞれ楽しそうに過ごしている笑顔が印象的でした。キャンプ初日には、班に分かれて班対抗カレー作りを行いました。

した。班ごとにそれぞれ異なった具材を使って美味しくなるように考えながら調理し、順位をつけることが難しいほど大変美味いカレーが出来上がりました。

二日目には待ちに待ったバーベキューを行い、ここでは中高生男子達が火起こしから食材を焼き、皆に配るところまで率先して取り組んでくれました。そのお陰で皆、美味しく楽しい食事の時間を持つことが出来ました。中高生女子達は女の子ということもあり、手先が器用で洗い物を手伝ってくれたりと家庭的な姿を見ることが出来ました。

普段の生活ではゆっくりと時間をとり話をするのがなかなか難しい為、キャンプではゆっくりと子ども達と話す時間やキャンプをとる時間が作れたことで、子どもが持っている想いや夢などを聞き、知る事が出来た充実した三日間だったと感じています。

天候が悪かつた為、キャンプファイヤーは室内で行うことになりましたが、この日の為に職員

員が考え工夫を凝らした出し物に子ども達も大盛り上がりでした。

あつという間の三日間でしたが、全力で遊び通した三日間です。職員にとつても子ども達にとつてもお互いを知る良い機会となり、子ども達との距離もより縮められたのではないかと感じます。

これからも助け合い、想い合い、ぶつかり合う中で人との信頼関係を築き、安心して過ごす場となるよう、子ども自身もそうですが職員自身も学ぶ事が出来ればと願っています。

今年の琵琶湖キャンプの良い点・反省点を活かし、来年のキャンプが更に良くなるよう努めていきたいです。

(小島)



小学生、夏のキャンプ

いっ黒木

岡山県「黒木キャンプ場」の利用は、今年で二回目。青い空、白い雲、まさにキャンプ日和の二泊三日間。最終日、帰り際に自然も私達との別れを惜しむかのように少しの陰りと雨を降らせた程度で、子ども達も満足気。岡山県の山奥へ向かう道はクネクネ・グルグルで、小学生十六名とお兄さん・お姉さん七名

ただ流されているだけだったり・あつという間に時間が過ぎていった。木工教室にて、カスタンネット・えんぴつ立て・写真立て・イスの中から好みの物を選んで作る際やオリエンテーリングでも、それぞれの個性を垣間見ることができた。

の一行が車酔いするまでに時間はかからなかつた。途中で休憩してからは大復活！バスレクレーションで盛り上がり、キャンプ場に着くと、澄んだ空気が緑いっぱいの中、早速子ども達は清流倉見川で大はしゃぎ。

帰りの車内では、子ども達の寝息が聞こえてくるどころか、おしゃべりが耐えることはなかつた。そして、皆それぞれにつくった目に見える思い出を手にも、目に見えない楽しかった思い出を胸に、車を降りた。

食事は、皆で材料を購入してそれを調理した物。子ども達も率先して火をおこしたり、枯れ木を拾ったり、焼いて炒めて・・・食もすずんだ。

子ども達と共にキャンプができて、子ども達の沢山の笑顔に出会えたことに、心より深く感謝！

(李)

虫取りやすいか割り、肝だめに花火等楽しんだが、とにかく子ども達は川でよく遊んだ。小魚やおたまじゃくしを手ですくったり、かにをつかんだり、網とバケツを持って生き物探し。川の中でシンクロをしてみたり、岩からの飛込みを繰り返したり、



子ども会のクリーン作戦

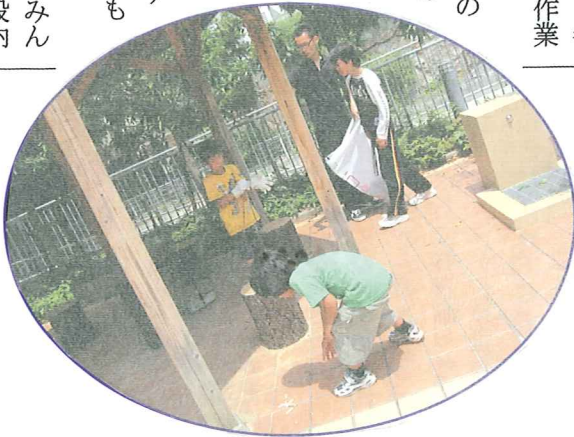
「子ども会」の立案で、去る七月十日(土)、真生塾の施設内とその地域周辺のクリーン作戦(清掃活動)を行いました。

「子ども会」は、幼児から高校生までの代表有志の子どもたち男女計十名と職員三名とで結成されています。子どもたちと私たち職員との話し合いの場を月に何度か設けて、「こんなことを施設全体でやってみよう！」ということを企画・立案・実行しています。

今回のクリーン作戦は、子どもと職員を六つの班に分け、各班ごとに分担箇所を定め、作業を行いました。

各班とも下は三、四歳の未就園児から上は高校生の子どもがおおり、上の子が下の子の面倒をみたり、掃除の仕方を教え教わったりとなかなか微笑ましい場面も垣間見られました。また、懸命にゴミを拾ったり、草を抜いたりする姿も見られ、とても頼もしく感じられました。

クリーン作戦後は、外でみんなで昼食をとりました。施設内



(福田)

や周辺が掃除され「すっきりして気持ちがいい！」という気持ちを持っていただいたのは職員だけではなく子どもたちも同じだったようです。

何か一つのことを子どもたちと職員とで手を携えて行うことの大切さを再確認することが出来た一日でした。

今後も「子ども会」のメンバーで様々なことを話し合い、企画し実行していかれたらと願っています。

銀メダル獲得!



毎年恒例の神戸市養護施設連盟主催のバレーボール大会が、八月二十六日に中央体育館にて行われました。

昨年は第三位。今年こそ「優勝」という意気込みは、それぞれあったと思いますが、猛暑の中練習に臨むのは、なかなか大変だったと思います。それでもコツコツ練習し、小学生一人、中学生八人、職員二人、合計十一人の万全体制で臨みました。昨年同様、全員揃って練習することは難しかったですが、男子フロアの子どもたちや他フロアの職員の方々も参加して下さいました。

しかし、試合が近づくにつれ、焦りも出てきて、その焦りから子どもたち同士がぶつかってしまふ場面もありました。それでもみんなの気持ちには、「勝ちたい」という思いがありました。

試合当日、会場に向かい、軽く体を動かし、抽選の結果リーグが決まりました。

初戦の対戦相手が連覇中のチームだということもあり、気持ちで負けてしまっていたかもしれせん。結果は敗戦。この流れが、残りの試合に影響してしまわないか・・・。

そんな不安もありましたが、負けじとみんなで声を掛け合い、見事残りのリーグ戦に勝ち、決勝トーナメントに進むことが出来ました。

決勝トーナメントでも接戦の中勝利し、決勝戦で初戦で負けてしまった相手と再び試合することが出来ました。決勝戦・・・ほんとうに大人も子どもも関係なく、無我夢中とはこのことだと思います。

試合は大接戦で負けてしまいましたが、結果は二位、銀メダルを獲得し、昨年よりも一歩前進しました。

試合が終わり、ホッとした気持ちも悔しさもありましたが、何より子どもたちと一緒にコートに入り、バレーボールの試合をし、二位という結果を残せたことに大満足し、本当に楽しかったなと思えた瞬間でもありません。子どもたちもきつと同じような気持ちだったと思います。この気持ちを忘れずに来年も「チーム一丸」となって一生懸命戦い、今度こそは真生塾に優勝旗を持って帰って来よう! また一年・・・夏に向けて一緒に頑張りましょう。

最後になりましたが、練習に参加して下さった皆様、応援に駆けつけて下さった皆様、本当にありがとうございました。

(森本)



《児童養護施設 神戸真生塾》

五人のみなさん、おめでとうございませう！

神戸市長表彰(勤続十五年以上)

児童指導員



竹原 裕昭

施設で無邪気に遊んでいた子どもたちが家族を連れて元気な姿を見せに来るようになりました。嬉しくもあり、自分自身、年を取ったなあ・・・と感じます。
今後も施設を出た子どもたちが会いに来てくれるよう頑張っていきます。



秋本 真一

暑い夏が終わった。

クーラーのない頃の夜勤は、うちわで扇ぎながら寝ている子どもたちに寄り添った。

今は、クーラーのお陰で、夜中に目覚めてぐずる子は少ない。

改めて、「子どもたちの心に寄り添う養護を実践しなければいけない」と反省している。

保育士



毛利 信幸

勤続十七年目となり、乳児院、児童養護施設、保育園でたくさんの子ともたちと出会ってきた事は、今また、児童養

施設に従事する上での大きな原動力となっています。

これからも初心を忘れることなく子どもたちの成長を支えられるようなお世話をした

と思います。



沖野 世津子

この度、神戸市から表彰状をいただき、真生塾で子どもたちと過ごしてもう十五年も過ぎたのだと、改めて実感しました。

振り返ると、未熟な私は、子どもたちと笑ったり怒ったり、時には泣いたりしながら、

過ごしてきました。その中で、子どもたちから

たくさん素敵なものももらい、それを支えにここまで歩んで来れたように思います。

私自身は、子どもたちに「何ができたのか・・・」と

悩むこともありましたが、子どもと共に成長していくという

姿勢で、これからも向きあっています。

また、子どもたちの成長に

民間社会福祉施設職員

神戸市長感謝状

保育士



山本 沙和

毎日が試行錯誤の連続で、無事に六年目を迎えられるとても嬉しいです。今まで職員の方々の支えや

は大人同士の信頼関係も大切だと思っています。協力し合い一人一人の子どもの成長を見守り支えていけるよう頑張っています。

出会った子どもたち、支えて下さった職員の方々に感謝しています。ありがとうございます。

子どもたちの笑顔に何度も助けられてきました。これからも子どもと共に自身も大きく成長できるように頑張りたいと思いますので宜しくお願いします。



《保育所 真生きらぎら保育園》

はじめの、雨のうんげうんかい



去る十月三十日は、はじめの雨の運動会でした。もちろん真生塾のホールで行うことも初めてです。予行演習では演じてみても、いざ保護者の方が来られるとなると空間的には狭く感じます。

子どもたちも保護者の方との距離が近すぎて、どんなふうになるだろう・・・と心配になることもありました。

たが、特に幼児クラスは見てもらっている！、ということのパワーにして張り切っている姿が印象的でした。

様々な競技の中で、当日を迎えるまでは友だちとの

ケンカもあったそうです。勝ちたい！、という気持ちからの争いだったのですが、その中で少しずつ仲間と力を合わせることができたのではないのでしょうか・・・？

一つのことを成功させるためには、一人の力だけでなく、みんなで力を合わせることに子どもたち気付いていくことができるようにしていきたいと思えます。

乳児クラスは当日にならないとどうなるかわからないことも多くありますが、その中でも少し



ドキドキした気持ちで取り組む姿もかわいく思えます。保護者の方と近い距離でどうなるかわからないという不安が消えたのは、温かい声援と拍手でした。ホールの床に座って見ていた子どもの視線に合っ



いたようです。そのことでした。そう運動会の一体感がありました。同じ目線で感じ合うことができ、とても楽しく終えることができました。

(山口)

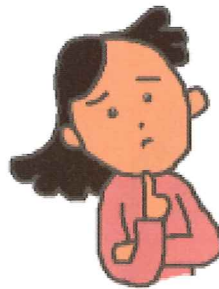
皆様のご意見、ご要望をお聴きしています。

神戸真生塾苦情処理委員会

- 苦情受付担当者 難波美智子(子ども家庭支援センター センター長) / 森 みずき(保育所 真生きらきら保育園 主任保育士)
- 苦情解決責任者 富川 和彦(児童養護施設 神戸真生塾 施設長) / 綿谷 榮子(乳児院 真生乳児院 施設長) / 上杉 徹(保育所 真生きらきら保育園 園長)
- 第三者委員 森光 規之(当法人 監事) / 中村 悦子(主任児童委員 中央区山手地区民生委員児童委員)
- 苦情受付件数 平成22年度 7月より10月まで 4件

ロータリー子どもの家は、児童福祉法に基づく児童家庭支援センターとして、神戸市から認可を受けています。

二〇〇五年度の四月より、従来の活動とともに、子どもと家庭についての専門相談機関として、働いています。



毎日、午前9時〜午後6時、緊急のご相談は夜間もOKです。

子育てに
困った時は
先ず電話！

子育てホットライン(相談専用)

TEL,078-341-6493

神戸真生塾子ども家庭支援センター
(ロータリー子どもの家)

Homepage <http://www.rotary-kodomoie.org/>

《編集後記》

今年度から広報誌の係をさせていただき、奮闘しながら作業を進めて行く度に、改めて「皆様の支えがあつてこそだ」と感じています。(山本)

『愛』第一七号はいかがでしたか？今号は行事内容の記事をたくさん掲載させていただきました。子どもたちの奮闘ぶりや生き生きとした姿が、少しでも伝わったなら幸いです。(福田)

早いもので、今年度も半年が経ちました。子どもたちとの生活は、毎日新しい発見だらけです。そのことをこれからも、記事にできたらと思つていきます。(上田)

とても暑かった夏が過ぎ、過ごしやすい季節になってきました。これから、人形劇やクリスマス祝会など、子どもたちが楽しみに待っている行事がたくさんあります。次号では、そちらの様子もお伝えできれば・・・と思つていきます。(藤原)

秋も深まりつつある今日この頃、子どもたちは運動会、遠足と様々な行事を経験しながら、各々が成長していることでしょう。行事はもちろん、日常の一コマからも、子どもたちの学びや変化を感じ取れる感性を、自分自身も磨き続けていかなければ・・・と思つています。(有吉)